実施年月日
3. 2. 6
富山大学

令和３年度　富山大学大学院芸術文化学研究科（修士課程）

一般入試　【後期日程】・外国人留学生特別入試

入学試験問題

小　論　文

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで，この試験問題を開いてはいけません。
2. 問題用紙（本文）は３枚，解答用紙は２枚，下書用紙は１枚あります。問題用紙および解答用紙に不備があった場合は，手を挙げて監督者に知らせてください。
3. 解答は，すべて解答用紙に記入してください。
4. 受験番号は，解答用紙２枚のそれぞれの指定欄に算用数字で記入してください。
5. 試験終了後，問題用紙および下書用紙は，持ち帰ってください。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

容貌を手がかりに人物像をとらえる、表情を読み取るということは日常的に為される。だが、一方向からとらえられた固定されたイメージは、その人物の一瞬の姿を顕現させる表面的なものでしかなく、見た目からは探りえない不可知な部分があることは認めねばなるまい。逆説的に言えば、だからこそ肖像を読み取るという行為（あるいは表情を読み取るという行為全般）は、像そのものを超えた過剰な意味を背負って存在するものなのだろう。人は表情から読めるはずもない感情を勝手に誤読し、それのみではわかりえないはずの人物の性格を肖像から類推する。もちろんこういったことが無意味であると述べているわけではない。過剰に意味を見出しがちだということを指摘しているだけである。

ここで想起されるのが似顔絵である。「似顔絵」という文字に注目すれば、肖像と同様の意味になるように思われる。しかし実際には、この二つはニュアンスを異にしている。似顔絵はより身近で手軽なイメージがある。さらに重要なのは、似顔絵が人物の個性や欠点を強調することで特徴を際立たせるような効果を持っていることであろう。一筆書きのような線描でもその人物らしく見えるのは、当人と他の人物を分かつ特徴を誰にでもわかるように誇張することに起因する。

実は肖像も程度の差はあれ、似顔絵と同様の要素を持っている。全般に似顔絵よりも質感や写真的リアリティを持つがゆえに、誇張にあまり気付かれないということであろう。

肖像は、本来多様である（様々な表情を持つ、年齢により異なっていくなどなど）人間の像をある典型で代表させる。人物の特徴をとらえ、中心的でない要素を捨象する。さらには内面的特徴（例えば優しいとか、厳格であるとか）を示す表情を外見に加えていく。こうして考えると、負の面も含めた全人格を提示することなどできうるはずもなく、肖像が総合的人格を表すとは言いがたい。

しかし、そのような限界を超えて、もしくは限界を承知しながらも、私たちはその人物を代表するに相応しい容貌と人格の表現を湛えた絵姿、望むらくは理想的な絵姿に身代わりを演じさせ、肖像は後世にまで視覚的イメージとして伝わること

となるのである。源頼朝をはじめ、教科書などで紹介され続けた像主でさえ、研究が進むにつれ、疑念が呈される例がある。肖像に描かれた人物の伝来が確かであっても、これまで記してきたように、もともと肖像が全人格をとらえる種のものではないことは明白である。

ただし、多くの場合、肖像がその人物をそれなりに忠実に表していると見なされていることも確かである。いちいち真の姿かどうか分析するなど面倒な話であるし、西郷隆盛銅像のように、本人をモデルにできずに作られたにもかかわらず、また本来どんな風貌だったかわからないにもかかわらず、それ以外の顔を思い出すのは困難なほど普及したものもある。このように考えていくと、肖像は似せるという要素があると同時に、その人物に対して期待すべき人格なり徳望なりを表象するという側面があることがわかるであろう。ある意味では理想的な像として肖像は存在する。

加えて肖像を考えるに厄介なのは、依頼主と描き手の問題である。依頼主の多くは、なるべく像主（依頼主本人であれ、先祖や崇敬する人物であれ）を様々な意味で良く見えるように依頼する。描き手はその要請に忠実に描こうとする場合が多かろうが、ここでいくつかの問題が浮上してくる。描き手の技術が追いつかなかった場合の問題、そして表現意欲の問題である。下手な画家であれば、容貌を似せるのは困難である。その上、期待すべき人格も表現できず、従って肖像としての機能を果たせない。

さらには特に近代における芸術表現の問題と肖像との関係がある。オリジナリティ、個性と先駆性が評価の基軸となる芸術、美術の範疇では、形似という観点にはそれほど重きをおかれない。レンブラントの肖像などでは表現の深み、心理描写などが高く評価されるが、まだ容貌の近似も論点として活きている。これが時代が下って近代の人物表現となると、似ることよりも、表現性やコンセプトの方が大切となってくる。ピカソのモデルとなった人物が、できあがった肖像を見てこんなものは自分の顔ではないと憤慨するという話はいかにもありそうなことであるが、像主が自分との同一性を認められないような肖像が美術の世界では珍しいものではなくなっている。もちろん美術家は写実的近似とは異なるリアリティのもとで制作しているわけであり、表現性が増したからといって必ずしも美術家がリアリズムを失ったというわけではないことは付記しておかねばならないだろう。ただしこの時点での芸術的肖像は、当初持っていた身代わり的肖像としての意味を限りなく

希薄にしていることになる。外見的写実性や人格の描出と芸術的表現性の相克があったとしても、それはかえって肖像の表現領域を深く広くこそすれ、阻害するものではない。

（平瀬礼太『〈肖像〉文化考』春秋社、２０１４年、３―６頁）

問１　この文章全体を要約しなさい。（２００字程度）

問２　傍線部に「肖像を考えるに厄介なのは、依頼主と描き手の問題である」とあるが、あなたが経験あるいは見聞きした社会と請負人との間で起こる問題について例をあげて述べなさい。（６００字程度）